

白河街区（延勝寺跡）・岡崎遺跡の発掘調査－関係者説明会資料－

平成30（2018）年10月5日（金）
京都大学文化財総合研究センター

- 2018年7月下旬より、京都大学外国人宿舎（仮称）の建設にともない、予定地約500㎡の発掘調査を行っています。
- この一帯は、平安時代後期～末にかけて、当時の天皇やその近親者たちの願いで数多くの寺院が建立され、都のように街が整備された「白河街区」の範囲内にあります。また、下層には、弥生～古墳時代の遺跡が確認され、「岡崎遺跡」として登録されています（図1）。
- 建てられた寺院は、その名から「六勝寺」と総称され、調査地点はそのうちの「延勝寺」の範囲に相当するもの、と推測されています。しかし、塔や阿弥陀堂などが確認された法勝寺や尊勝寺以外は手がかりに乏しく、所在地や範囲は諸説あります。延勝寺の比定地でも、これまで具体的な建物遺構は見つかっていません。
- 調査は、現在、平安時代末～鎌倉時代の遺物を大量に含む第5層黒褐色土を掘り終え、第6層黒色粘土層の上で見つかった遺構について調べている段階です（図2）。調査地の本来の地形は東側が高く、黒色粘土層は中央～西半一帯の低い部分を中心を埋めるように堆積しています。平安時代末期以前からの湿地であった場所を、瓦や土器などをまじえて整地したものと想定され、その履歴を詳しく把握することもこれからの課題となります。
- 見つかったおもな遺構は（図3）にまとめました。白河街区の時期については、調査区西半で土器溜まりや柱穴、東半で瓦溜まりがひろがっています。
- 注目される遺構に、調査区東半で見つかった方形土坑SK1があります（図4・5）。東西3m×南北3.6m、深さ0.5m程度を垂直に掘りくぼめ、壁面を板で土留めするもので、床面には拳大程度の礫を敷き、溝を穿つ面を上に向けた角材で囲んでいます。内部は、角材から壁面にかけての外回りに砂利が埋積し、その上部は大きな礫や瓦を含んだ砂混じりの土で埋まっています。上面の隅や辺の中央付近に礎石がみられることから、上屋があった可能性もあります。時期は、出土遺物から12世紀末～13世紀初頭ごろに比定されます。
- 類例の無い珍しい遺構であり、現在までのところ遺構の性格は特定できていません。建物の掘り込み地業（地盤を改良して強化や湿気抜きをはかる）、あるいは水場や地下蔵のような構造物では、などの意見をいただいておりますが、今後さらに調査と検討を必要とします。このように性格は不明ながら、延勝寺の比定地において施設の遺構が確認された意義は大きく、白河街区を中心とする古代～中世の歴史研究にとって重要な発見と言えます。

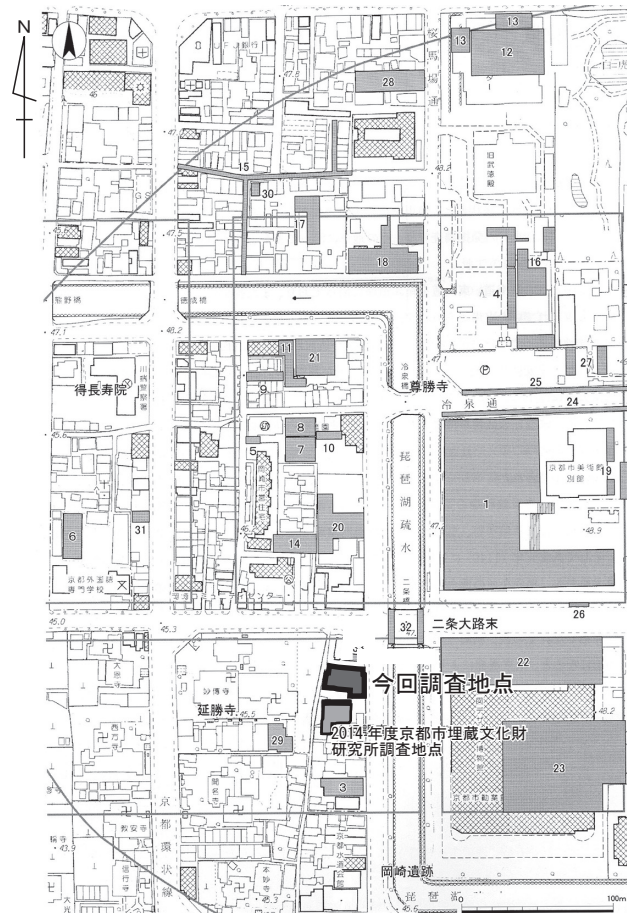


図1 調査地点の位置 縮尺1/5000
(公財)京都市埋蔵文化財研究所2014『延勝寺跡・岡崎遺跡』
(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報2014-1)に加筆

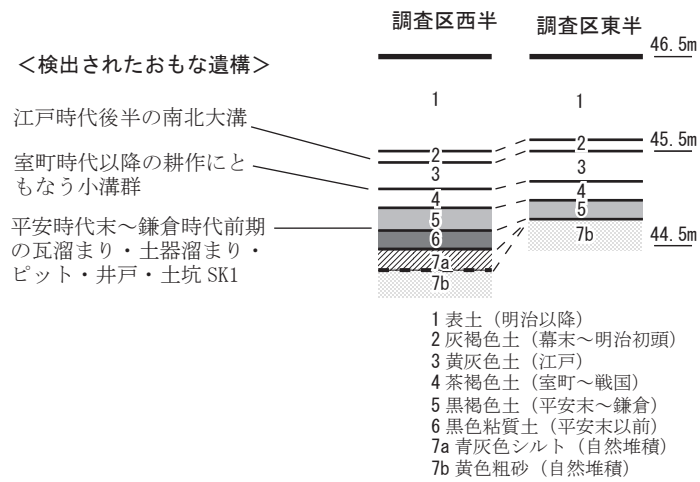


図2 調査区の層序模式図

<参考>
六勝寺(りくしょうじ)の発願者(供養年)

- 法勝寺：白河天皇（承暦元年1077）
- 尊勝寺：堀川天皇（康和四年1102）
- 最勝寺：鳥羽天皇（元永元年1118）
- 円勝寺：待賢門院（太治元年1126）
- 成勝寺：崇徳天皇（保延五年1139）
- 延勝寺：近衛天皇（久安五年1149）

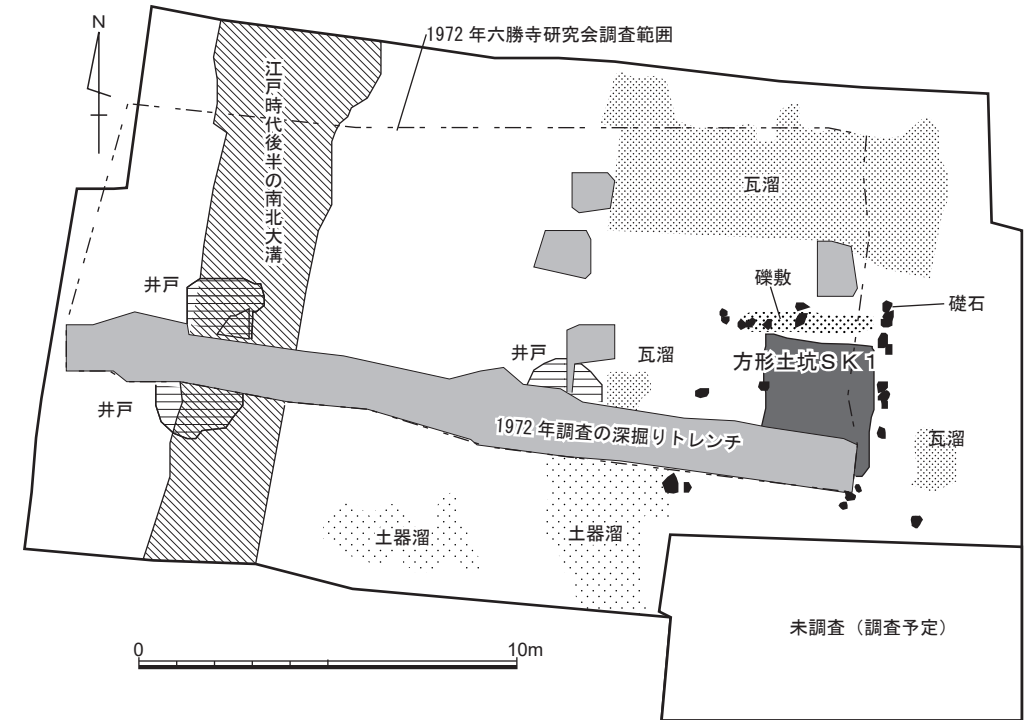


図3 おもな遺構 (縮尺1/200) 特に注記無いものは平安時代末～鎌倉時代前期



図4 方形土坑SK1 (上が北)

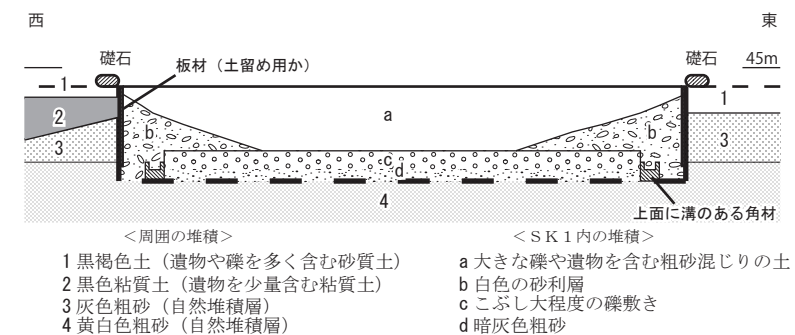


図5 方形土坑SK1の断面模式図 (縮尺約1/40) 0 1m